

## 附属小学校とフィリピンの小学校2校との ビデオレターを通じた交流活動

Video Letter Interaction Program between Naruto University Attached  
Elementary School and Two Elementary Schools in Phillipines

田村和之, 沖彩葉, 川口綾美, 宮脇勇気, 米倉隆平, 石坂広樹  
Kazuyuki TAMURA, Ayana OKI, Ayami KAWAGUCHI, Yuki MIYAWAKI,  
Ryuhei YONEKURA, Hiroki ISHIZAKA

鳴門教育大学  
Naruto University of Education

### 1. 目的・成果・課題・展望

2014年度(平成26年度),我々は1年間を通して鳴門教育大学附属小学校(以下,附属小学校)の第4学年(全3学級)の児童たちとフィリピン共和国(以下,フィリピン)の公立小学校2校(A小学校では第4学年と第6学年,B小学校では第6学年)との英語を使用したビデオレターの交換を通じた交流活動の支援を行った。2015年1月末のフィリピン訪問は,2014年10月から12月にかけて附属小学校で作成した児童のビデオレターをフィリピンの小学校へ届け,返信のビデオレターを撮影してることが主目的であった。今回は著者ら計6名(教員2名,大学院生4名)がフィリピンを訪問したが,交流活動自体には他にも鳴門教育大学大学院教育研究科の言語系コース(英語)の教員1名,附属小学校の教員2名が参加した。また,フィリピンには同行しなかったが,多くの大学院生(国際教育コース&現代教育課題総合コース)がボランティアとして附属小学校の児童たちがビデオレターを作成する活動に参加した。

2015年1月末のフィリピン訪問では,交流相手校である2つの小学校において無事に附属小学校で撮影・編集したビデオレターを上映し,またフィリピンの児童たちからの返事も撮影することができた。そして,2015年2月に附属小学校における外国語活動の時間を使用して,フィリピンから持ち帰った返信のビデオレターを附属小学校の児童たちに鑑賞してもらった。

今回の交流事業では主な活動拠点が日本であったた

め,附属小学校での活動はゆとりをもって取り組むことができた。一方,フィリピンでの活動については時間が制限され,しっかりとした計画を基に活動できなかったのが課題として残った。また,今回の交流活動は本年度のみという1年間の期間を限定した活動をしたが,このままでは単純な英語を使った交流で終わってしまい,本当の意味での国際理解に繋がりにくいことも課題として残ってしまった。

今後,新たな交流活動を行う場合には単純な(1~2回のみ)ビデオレターの交換ではなく,2年以上の期間をかけて,もしくは単年の期間に限定されたとしても,複数回の交流を行えることが望まれる。また,その内容は挨拶や簡単な自己紹介ではなく,よりお互いの文化を理解する内容を加えたり,形態もビデオレターだけではなく,手紙であったり,お互いの小学校を訪問する形を含むことも考えられる。本稿では,今回の交流活動の背景と実際の我々の活動(ビデオ撮影とフィリピン訪問)について紹介する。

### 2. 背景

外国語活動は1998年(平成10年)に学校教育に取り入れられた総合的な学習の時間の中で,「国際理解に関する学習の一環としての外国語活動等」の一項目とされ,2000年(平成12年)より段階的に実行されてきた。また,2008年度(平成20年度)には国際理解教育の重要性から,総合的な学習の時間とは別に外国語活動の時間が新設されるに至った。

本学附属小学校では,これまでも英語活動に積極的

に取り組んで来ており、現在でも第1学年から月1回、そして第3学年からは毎週外国語活動が行われている。そこでは本学小学校英語教育センターと本学大学院の言語系コース（英語）の支援を受け、授業改善や教材開発に常時取り組んでいる。

一方、本学教員教育国際協力センターと本学大学院国際教育コースにおいては今までの国際教育協力活動で得られた知識と経験を活かし、さまざまな国際理解教育活動や研究に取り組んで来た。その一環として本学に所属している主に英語圏からの留学生を附属小学校の外国語活動に派遣するなどの支援も行っている。

今回のフィリピンとの交流は2014年2月に教員3名と学生3名でフィリピンの中央ビコール州農業大学において開催された授業研究のワークショップに参加したことから始まった。このワークショップの後、我々は大学近隣の小学校2校（A小学校とB小学校）において授業観察を実施した。そして帰国後、2014年度における附属小学校の外国語活動の一環として、この2校と交流活動ができないかということを提案し、本交流活動の計画が出来上がった。本活動を通して、児童が日本語以外の言語や海外の文化について体験的に理解を深め、コミュニケーション能力や国際理解への意欲を高めることが目的である。

### 3. 事前の活動

2013年6月にフィリピンとの交流活動を行うことが決定した後、まずは同年7月末から8月頭にかけて石坂准教授がフィリピンの2小学校を訪問した。この時に両小学校において附属小学校との国際交流活動を行うことの確認をとり、まずは現地の小学生から附属小学校児童たちへの質問と、学校で行われていた音楽祭の行事を撮影してきた。

同年10月、フィリピンで撮影されたビデオを附属小学校の大宮教諭が編集し、英語の字幕を追加して第4学年の児童たちに鑑賞してもらった。この時、児童たちにビデオで何を見たか、またどのような質問があったかを発表してもらった。そして、11月の活動では児童たちが何を返答したいか、または日本・徳島のどのような文化を紹介したいかをまとめ、各学級を8グループに分け1グループ（4～6名）に1つのトピック（阿波踊り・日本の世界遺産・学校行事・学校の授業など）を選ばせた。

その後は児童たちが各グループに分かれ、今までに学習した簡単な文章等を用いて絵や写真と共にそれぞれのトピックに関する紹介を行う練習をし、12月末までには無事にフィリピンへ持って行くビデオレターが完成した。このグループ活動では児童たちが各グ

ループに分かれて活動を行うため、国際教育コースと現代教育課題総合コースから大学院生を集い各グループの活動の補佐と動画の撮影を手伝ってもらった。撮影した動画は大宮教諭により編集され、フィリピン出発前に石坂・田村の両名へと託された。

### 4. 日程

- 1月24日：フィリピン・マニラ市に到着。
- 1月25日：ピリ市へ移動。活動のための備品確認・事前準備。
- 1月26日：午前中に大学院生3名が合流。午後はA小学校の第6学年を訪問。附属小学校にて撮影された動画を鑑賞してもらい、その後返信用の動画を撮影。
- 1月27日：A小学校の第4学年を訪問。附属小学校で撮影された動画を鑑賞してもらい、その後返信用の動画を撮影。
- 1月28日：B小学校の第6学年を訪問。附属小学校で撮影された動画を鑑賞してもらい、その後返信用の動画撮影を行う。午後には同クラスにおいて算数の授業や生徒会の選挙活動を観察。
- 1月29日：A小学校を再度訪問。第4学年から第6学年の様々な授業や子どもたちの学校生活を観察。
- 1月30日：現地にて資料収集。
- 1月31日：現地にて資料収集。
- 2月1日：マニラ経由で帰国。

### 5. 活動内容とその考察

今回の交流活動で訪れた2つの小学校へは、石坂は既に複数回、田村は2014年2月にも訪れており、教員をはじめ児童たち（特に高学年の児童たち）は我々両名の顔を覚えていてくれた。一方、同行した4名の大学院生は全員が初めての訪問であった。そこで、フィリピンの小学校での活動はだまかに以下の通りの順番で行われた。

- 1) 日本の大学院生による自己紹介とアイスブレイキング
- 2) 附属小学校からの動画の鑑賞
- 3) フィリピンの小学校の先生による振り返り・返信内容の相談
- 4) フィリピン児童による学校・生活紹介（動画撮影）
- 5) 数名のフィリピン児童から附属小学校へのメッセージを撮影（上記(4)と同時進行）
- 6) フィリピン児童との交流（動画撮影無し）
- 7) 授業風景を観察

### 5.1. 自己紹介とアイスブレイキング

石坂・田村の両名が教室に入ると児童たちは元気よく挨拶してくれた。その後、4名の大学院生にも元気に挨拶をしてくれたが、彼らは初めての訪問であったので、児童から「誰?」という声がちらほら聞こえた。そこで、学生の4名は自己紹介を簡単にした後、事前に準備していたアイスブレイキング活動、「あたま・かた・ひざ・ポン!」を子どもたちと一緒にやった(図1)。歌詞はもちろん日本語であったが、必要な単語は「頭」「肩」「膝」「ポン」「目」「鼻」「口」「耳」など、

ほんの数個のみである。この結果、日本語を全く知らないフィリピンの子どもたちであっても、ほんの数分の練習で歌えるようになって、すぐにどんな歌であるか理解することができた。また、歌の直後に学生が「ここは?」と質問しながら学生が体の部位を指し、フィリピンの子どもたちが答えるというゲーム性もあることが特徴である。そのことにより、子どもたちに非常に受けが良く、その後の活動でも学生たちが子どもたちに問題無く受け入れられた要因の一つであったと考えられる。



図1. 大学院生によるアイスブレイキング。「あたま・かた・ひざ・ポン!」の音楽を紹介して、歌いながら児童と一緒に遊ぶ国際教育コースの大学院生(左:A小学校第6学年,右:A小学校第4学年)。

### 5.2. 附属小学校からの動画の鑑賞

アイスブレイキングが終わると、まず日本から持って来た附属小学校からの動画を鑑賞してもらった。フィリピンの小学校ではどのような設備があるのかわからなかったため、機材一式(コンピューター、プロジェクター、スピーカー、そして延長コード)は日本から我々が持参した。ただ、動画を投影するためのプロジェクターは持ち運びが不可能であったため、フィリピンの教室を訪問した後にホワイトボードを使用したり、ホワイトボードが無い場合は黒板に模造紙を貼っ

たりすることで臨時のスクリーンとした(図2)。

フィリピンの教室は窓も日本と違い風通しのために常時開かれており、そもそも防音効果が無いため、外部の音がかかなり大きく、ビデオの音を聞き取ることは難しかった。しかし、そんな環境においても児童たちは全員、集中して附属小学校からのビデオレターを見ていた。また、集中してはいるが、天麩羅や寿司の紹介の時にはフィリピンの児童たちも反応したり、阿波踊りや体育の授業の映像を見ては面白そうに映像を見たりしていた(図3)。また、A小学校の第4学年で

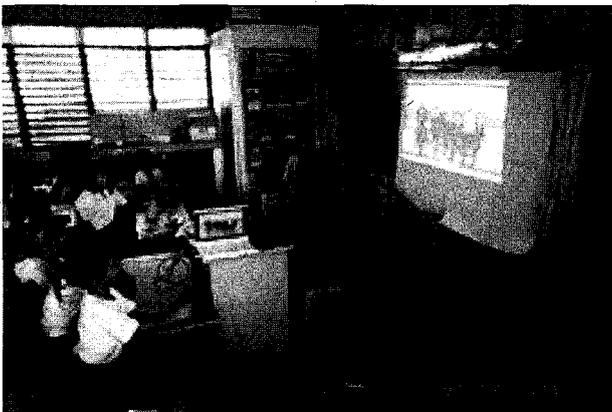


図2. A小学校第4学年では教室にスクリーンもホワイトボードも無かったため、模造紙を使用して臨時のスクリーンを作り、そこにプロジェクターで動画を投影した。

図3. 阿波踊りの映像を見ながら笑顔を見せるフィリピンの子どもたち(A小学校第6学年)。

は附属小学校の体育の授業で行われていた活動（二人一組になり、1 m 程離れて向かい合って立ち、お互いを押してバランスを崩し合うゲーム）を見て、ビデオレターの観賞後にみんなで同じようなことをして遊んでいた。

### 5. 3. フィリピンの子どもたちからの返信

附属小学校からの動画を鑑賞後、それぞれの教室において担任の先生たちがまず見たビデオの内容を簡単に振り返った。そして、ビデオレターをもらったお返しに何ができるかを子どもたちと相談していた(図4)。

その後、田村と学生4名が手分けしてその子どもたちの活動や遊んでいる様子をビデオカメラや写真で撮影して回った。田村は主にビデオカメラを担当しており、主に子どもたちの様子を一步離れた所から客観的に撮影を行っていた。一方、学生達は主にデジタルカメラを使用して写真を中心に撮影していたこともあり、田村とは逆に自ら子どもたちの中に入って、一緒になって工作や活動をしたり、外で子どもたちと一緒に遊んだりしていた。



図4. ビデオレター観賞後に先生が子どもたちと何をビデオに撮影するか相談している様子 (A 小学校第6学年)。

A 小学校第6 学年では、工作の授業で作っていたカラフルな折り紙をたくさん使用した花を紹介してくれたり (図5左)、外で子どもたちに人気のある遊びを紹介したりしてくれた (図5右)。この学級は特に外で色々遊ぶのが大好きなようで、教室内で何かするよりは外で体を動かす方が好きな子どもたちが多いようであった。



図5. 工作の授業で作っているカラフルな花の作業風景を紹介してくれる子どもたち (左写真) と外で人気のある遊びを元気に紹介してくれる子どもたち (右写真: 高い位置に張ったゴムをジャンプして足先に引っ掛ける遊び)。

A 小学校の第4 学年では、第6 学年と同様の遊びを外で行ったり、工作で作っている紙細工 (花や船など) も紹介したりしてくれたが、ある子ども達は教室で遊んだり (図6左)、今流行している歌を歌ってくれたり、クラス全体でダンスミュージックに合わせて踊ってくれたりした。また、学年は3 年生であるが、このクラスの担任の先生<sup>1</sup>がちょうど第3 学年で近日中に行われる行事のために教えていたということで、結婚式などのお祝いの時にお披露目するダンスを

踊ったりしてくれた (図6右)。

B 小学校においても外の遊びや結婚式でのダンスなどを紹介してもらえたが、この学校ではさらに売店の様子 (図7左) や生徒会の選挙活動 (図7右) なども撮影することができた。

また、動画のみで写真では残念ながら記録が残っていないが、このクラスでは演劇の語り (英語のスピーチ) の大会に出席した児童がいたようで、英語で見事な語りを見せてくれた。

<sup>1</sup> フィリピンでは日本と違い、一人の教員が科目や活動によっては他学年の児童を教えることもある。

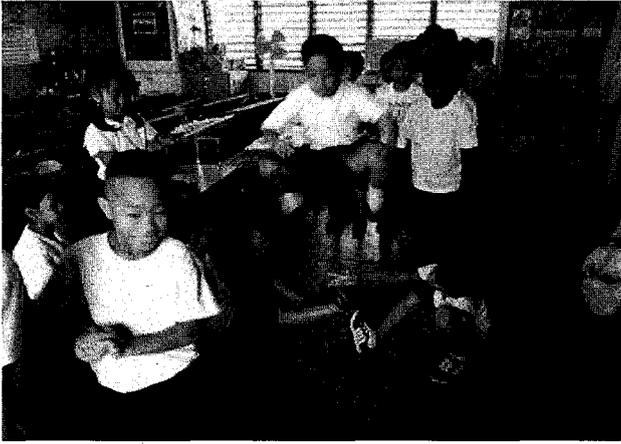


図6. 教室内で順番にジャンプをして遊ぶ男の子たち（左写真）と結婚式などのお祝いの場でのダンスを踊ってくれる子どもたち（右写真）。

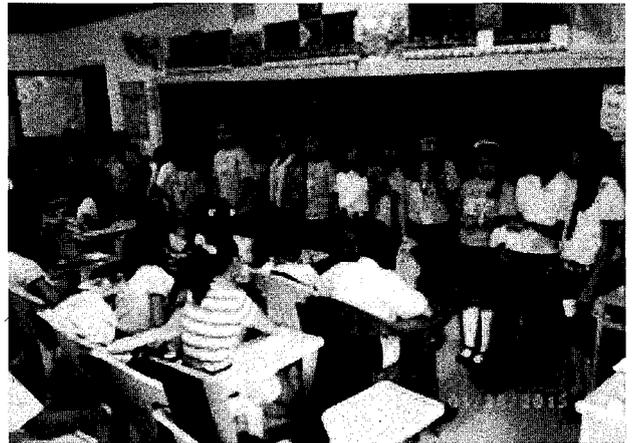


図7. B小学校にある売店兼カフェテリア（左写真）。休み時間となるとたくさんの児童が売店に押し寄せ、お菓子や軽食（スパゲティー）を買って食べていた。また、6時間目の授業が終わった後には生徒会の選挙活動が有り、児童たちが自分たちのことを自己紹介し、公約の紹介を行っていた（右写真）。

#### 5. 4. フィリピンの子どもたちとの交流

フィリピンの小学校での動画を撮影した後、休み時間、そして放課後、大学院生たちはどの学校においてもフィリピンの児童たちと仲良く遊んだり、交流活動

を行ったりしていた。日本からの学生はまだまだ流暢な英語とはいかないかもしれないが、国際教育コースに所属していることもあり、一生懸命現地の子どもたちと話したり遊んだりしていた（図8）。



図8. B小学校でビデオレターの撮影後、現地の児童と一緒に話をする大学院生たち。

#### 5. 4. 授業観察

両小学校において、返信用ビデオレターの撮影後、我々は現地の小学校の授業観察を行った(図9)。この時、A小学校ではビデオレターを届けたクラスのみではなく、第1学年から第6学年までの授業を自由に見ることができた(ただし、授業観察時のビデオ撮影は行わず、写真撮影のみで記録をとった)。この時に行われていた授業には現地語・理科・農業などがあつたが、一方では教員がおらず、教室の内外で児童が遊んでいる所もあった。

B小学校では第6学年のみの授業観察を行い、この日はビデオ撮影後、午後最後の授業(算数)を見ることができた。

両校において教科書や教材は日本と比べて遥かに少なかったり限定されたりしていたが、現地の先生たちは工夫して授業を行い、児童たちも楽しそうに授業を受けていた。また、グループ活動時には机に座って話し合うだけでなく、写真にあるように立って相談したり、必要であれば他のグループの所へ行って相談したりしながら活動していた。



図9. B小学校での授業風景(左写真)。この時は算数の立方体についてまず学び、グループで実際に紙を使った様々な立方体を使って各グループで自由に工作を行っていた。A小学校での授業風景(右写真)。個々では教員・大学院生が第1学年～第6学年まで自由に移動することができ、各自が興味ある授業を見て回った。写真では第5学年の理科の授業で「雲の種類」について授業を行っている様子。

#### 6. おわりに

今回の交流活動で訪れた2つの小学校では事前の準備をする時間が無く、日本から持って行った附属小学校のビデオレターを見てもらい、返信を撮影して帰国するまで1週間しか時間が無かった。また、日本では数ヶ月をかけて練習し撮影を行ったのだが、現地の子どもたちは時間があっても1～2日で撮影まで行わなくてはならず、当初は計画通りに撮影ができるか不明であった。

ただ、実際に現地を訪問してみると、子どもたちは非常に協力的で、またフィリピンの国民性もあるのか、非常に明るく、いろいろなことを嫌がらず・恥づかしがらずに撮影させてくれた。おかげで、現地での活動も非常にスムーズに進み、実際の予定よりも早く撮影が終わった。その結果、予備日も使う必要が無く、逆に両小学校において様々な授業を聞くことができた。

また、フィリピンの子どもたちは日本の文化、特にアニメ、には非常に興味を持っており、日本からのビデオレターを集中して鑑賞し、一生懸命に返事をしようとしていたことが大変助けになった。

今後の課題としては、日本では十分な準備期間がある一方、訪問先である学校では現地のカリキュラムもある上、日本ほど練習をしたり、一度撮影した物を確認して撮影し直したりする時間が無いことが解決すべき点であることがはっきりと分かった。実際には事前からしっかりと打合せを行ったり、可能であれば訪問する前に日本からのビデオレターを先に送って鑑賞したりしてもらうことも一つの方法として考えられる。

現時点ではフィリピンとの継続した交流の予定は無いが、今後新たな交流先を見つけた時には今回学んだ点を見返りつつ、できるだけスムーズに、より充実した交流活動を計画して実践したい。